

二〇〇五年度国文学会彙報

・研究発表会

「此君」と薫——王徽之からもたらされた人物造形——

桑原一歌（本学博士課程後期課程）

外来語の量的変化についての一考察

橋本和佳（本学専任講師）

△新入生歓迎会▽ 学生会主催

二〇〇五年四月七日（木） 京田辺校地紫苑館食堂

・講演会

大江文坡と源氏物語秘伝

飯倉洋一（大阪大学教授）

△国文学会総会・研究発表会▽

二〇〇五年六月二六日（日） 寧静館5F会議室

——〈学説寓言〉としての『怪談とのゐ袋』

・総会

・研究発表会

古代歌謡における〈对句〉

・小説の創作方法について

平野啓一郎（作家）

山本直子（本学博士課程後期課程）

△同志社国文学▽

提波達多の今様——『梁塵秘抄』法文歌の一性格——

第六三号 二〇〇五年一月二五日発行

収載論文八編

植木朝子（本学助教）

第六四号 二〇〇六年三月二〇日発行

収載論文十編

響き合う文学教材——『山月記』と『ひよこの眼』——

△国文学会会報▽ 第三三号 二〇〇六年三月二〇日発行

西尾勝彦（近畿大学附属高等学校・中学校）

△国文学会研究発表会・講演会▽

二〇〇五年一月二〇日（日） 寧静館5F会議室

二〇〇五年度修士論文題目

「後鳥羽院時代」としての『新古今和歌集』

——後鳥羽院の選歌基準と藤原定家と藤原家隆の歌風の変容  
に関する一考察——

ジョルダン・ジュセツペ

文芸の中の見世物

——嘶本と黄表紙を中心に——

石川雅持の雅の意識

——中国小説との関わり——

中島敦と南洋体験

——へ自己へ、そしてへ他者へ——

新聞社説における「ベキダ」の様相

『狂言記』の漢語

——近世語の影響と用語選択意識——

二〇〇五年度卒業論文題目

『万葉集』に詠まれた「袖」

——その意味と展開——

『古今和歌集』春歌の和歌配列

——よろずの花を中心として——

歌物語における女性の身分と恋愛

『源氏物語』における「契り」と「契る」と「宿世」

『源氏物語』のかおり

『源氏物語』女人の色衣

奥田友理

竹本茜

杉岡歩美

廣川雅子

小野貴久

田中裕子

三國奈々

乾裕美

原愛

柀理恵子

——無形・無色対有色の人物対比構造——

『源氏物語』における神性の行方

——光源氏はなぜ天皇にならなかったか——

『源氏物語』浮舟論

——「手習」をめぐる——

『源氏物語』における六条御息所の物の怪の造形をめぐる

——『御堂閔白記』『小右記』の物の怪の

記事と比較して——

中古文学における扇

——『源氏物語』花宴巻を中心に——

『無名草子』の女性論

——『源氏物語』の女性達——

平安物語における「月」

——『源氏物語』を中心に——

『宇治拾遺物語』「瘤取り翁」の特質

——『五常内義抄』との比較を手がかりに——

『宇治拾遺物語』における説話配列

——伴大納言説話を中心に——

『宇治拾遺物語』巻第八第三話「信濃国の聖の事」について

石井道子

金子陽介

中尾美美

大谷望美

中村由香里

河野絢香

関俊介

黒田拓馬

瀬戸大輔

竹村正之

謡曲《邯鄲》のモチーフ構造について

松 沢 佳 菜

鶴屋南北 悲劇の笑い

江口遊女像の形成

網 島 聖 子

——『東海道四谷怪談』から見る笑いの特徴——

内 山 裕 子

『平家物語』における返り忠

半 田 南

御伽草子『鉢かづき』における「鉢」と「箱」の役割

中 原 由 紀 子

近松の時代物における弱者の悲劇

森 岡 由 紀

道成寺の展開

中 馬 恵 子

——女・子ども・老人——

永 井 淳 子

——女の執念から紐解く道成寺——

中 井 小 夏

——錦文流と近松作品を中心に——

小 野 田 有 代

《自然居士》創造に関する一試論

中 井 小 夏

影絵演出の可能性

清 水 尚 美

——観阿弥の精神をめぐる——

中 井 小 夏

——『大経師昔暦』『鐘の権三重帷子』を

清 水 尚 美

——歌舞伎十八番の持つ二面性——

藤 井 丈 嗣

中心に——

高 橋 洋 子

忠臣蔵享受史について

井 上 晶 絵

近松における鏡の演出

高 橋 洋 子

——『仮名手本忠臣蔵』を軸として——

井 上 晶 絵

——その影響まで含めて——

高 橋 洋 子

宝暦期上方歌舞伎の劇作法

守 屋 美 紀

近松門左衛門と紀海音における心中場の比較

為 重 知 子

——『天竺徳兵衛聞書往来』と『仮名草子

守 屋 美 紀

紀海音の浄瑠璃における特質

佐 竹 麻 衣

——『天竺徳兵衛聞書往来』と『仮名草子

守 屋 美 紀

——海音『心中二ツ腹帯』と近松『心中宵

佐 竹 麻 衣

——『天竺徳兵衛聞書往来』と『仮名草子

守 屋 美 紀

——海音『心中二ツ腹帯』と近松『心中宵

佐 竹 麻 衣

——『天竺徳兵衛聞書往来』と『仮名草子

守 屋 美 紀

——海音『心中二ツ腹帯』と近松『心中宵

佐 竹 麻 衣

——『天竺徳兵衛聞書往来』と『仮名草子

守 屋 美 紀

——『大経師昔暦』『鐘の権三重帷子』を

清 水 尚 美

——歌舞伎十八番の持つ二面性——

藤 井 丈 嗣

中心に——

高 橋 洋 子

忠臣蔵享受史について

井 上 晶 絵

近松における鏡の演出

高 橋 洋 子

——『仮名手本忠臣蔵』を軸として——

井 上 晶 絵

——その影響まで含めて——

高 橋 洋 子

宝暦期上方歌舞伎の劇作法

守 屋 美 紀

近松門左衛門と紀海音における心中場の比較

為 重 知 子

——『天竺徳兵衛聞書往来』と『仮名草子

守 屋 美 紀

紀海音の浄瑠璃における特質

佐 竹 麻 衣

——『天竺徳兵衛聞書往来』と『仮名草子

守 屋 美 紀

——海音『心中二ツ腹帯』と近松『心中宵

佐 竹 麻 衣

——『天竺徳兵衛聞書往来』と『仮名草子

守 屋 美 紀

——『大経師昔暦』『鐘の権三重帷子』を

清 水 尚 美

『好色五人女』巻四におけるお七像をめぐる

——文章の表現技巧より探る——

田 辺 慶 子

宝暦期の通俗軍談利用

——浮世草子と『通俗三国志』『通俗漢楚

前 川 晃 子

軍談——

春町『悦鼠貞蝦夷押領』の政治性

秋 本 早 紀

『叶福助略縁起』考証

——滑稽本における重層的音声表現——

佐 藤 志 保

出版規制と浄瑠璃

——十辺舎一九の「太閤記物」——

森 田 彩 美

芭蕉の死

——『おくの細道』の虚構性について——

外 子 浦 双 美

戯作者の書いた引札

力のある文学

加 藤 遊

——江戸の化粧品宣伝を軸にして——

佐 藤 綾 子

近世における服飾と『源氏物語』

——小袖・伊達紋・袱紗・櫛——

小 島 由 子

江戸庶民とアルファベット

近世後期における庶民と寺社とのかかわり

拝 田 寛 子

尾 坂 藍

歌舞伎はなぜ明治期になくならなかったのか

——「富山売薬版画」「おもちゃ絵」「絵双

雨 宮 洋 子

六——

江戸文化と明治の法律

——開帳・見世物・春画——

辻 孝 明

幸田露伴「いさなとり」の構造

——その〈罪〉と〈罰〉——

大 森 照 元

『心の闇』を通して紅葉の金銭観を探る

樋口一葉『にごりえ』論

——にごりえに生きる女たち——

北 堀 ま じ か

谷崎の思想と芸術性

——『刺青』のいれずみ・清吉・娘とは——

米 谷 泰 宏

谷崎潤一郎『痴人の愛』

——譲治から見た〈西洋人〉——

河 島 未 央

『魔風恋風』論

——「女学生」と「墮落」をめぐる言説から——

益 田 慎 哉

『冥途』解析

——文章における方法とその現実性・虚構

性——

渡 邊 敬 久

明治文学における朝鮮への視座

——文学という「鏡」から——

大山高弘

宮沢賢治『注文の多い料理店』における色彩語について

秋田有美子

「猫町」と朔太郎

渡邊翔太

『さりしとほろ上人伝』論

松本美咲

——芥川龍之介の「聖人伝」——

芥川龍之介「庭」における庭復旧の研究

佐橋宏典

芥川龍之介『老いたる素戔鳴尊』論

津田康孝

——『素戔鳴尊』のもたらしたもの——

『河童』に見られる近代知識人の姿

竹若由美子

『愛撫』における「猫」

為川梨沙

——梶井基次郎の「へ生」について——

『居候勿々』論

黒澤夏子

太宰治の中期作品

吉岡里紗

——中期における前期の影——

『次郎物語第一部』

今原こころ

——母と子の次郎物語——

『貧窮問答』における社会性及び風刺性の提示

更家啓之

『三等重役』ベストセラーの理由

——ベストセラーになるタイミング——

藤田高弘

『錦繡』を壊したものと生んだもの

——三つの「初めにありき」と不安神経症——

今泉司

歴史小説の功罪

黒田高嗣

『青い山脈』が与えた影響と石坂洋次郎の認識

田中彰

戦時下の菊池寛

——なぜ菊池は戦争犯罪人になっていったのか——

山本暁子

三島由紀夫『青の時代』に於ける主人公の人物造型について

田中成彬

三島由紀夫の海

山本智

——『豊饒の海』を中心として——

現代の民話としての「直樹とゆう子の物語」

——シリーズの出発点『ふたりのイーダ』の要素から——

小山真理子

安部公房『闖入者』における近代的な文化家族について

渡辺亮

吉行淳之介『砂の上の植物群』論

——童謡から——

鍛冶光太

ホタルの雪が意味するもの

——宮本輝『螢川』と高度経済成長期——

佐藤綾子

村上龍の初期作品を通じて見えるアメリカ観・日本観

梶田健司

辻仁成研究

——表現者「辻仁成」の世界——

柳川信也

星野道夫作品論

——エッセイを中心として——

浅尾有美

中谷孝雄『春』論

——「こしらえない小説」について——

水上壽恵

筒井康隆『夢の木坂分岐点』論

——夢・現実・虚構から考えた体制的・非体制的——

長谷川静

自由と不自由のアンソロジー 差別の現在を見つめて

——『アニマル・ロジック』考——

松迫和泉

『赤い蠟燭と人魚』再評価

——未明童話の普遍性——

阪本麻子

『大鏡』の「る・らる」「せ給ふ・させ給ふ」の用法と文体

——敬度と上接動詞の違い——

田中麻友美

『平家物語』の美を表す表現

相田みつをの表現

宮田麻美

——書とエッセイの比較——

副助詞「ばかり」の文法的用法による意味分類と四つの文体

人見秀美

童謡と少年詩の擬声語

——まどみちお作品を中心に——

片山由紀子

新聞における女性表現について

新聞における外来語

小寺真美

——分野別の傾向——

中村安規子

若者語の造語法の推移

談話における助動詞「た」の用法

山本結

評論文・論説文の類型的文体

現代の歌謡曲の表記をめぐって

中谷梨佳

——『ぼっぺん先生』物語を中心に——

ブログで使われる表現について

——表現要素と組み合わせ——

西村麻衣子

大澤一司

高山綾

安永彩恵

今津かな子

京都方言における「やん」・「ねん」について  
漫画に利用される感動詞の発生元について

吉松宗一郎  
坂口博則